

酪農家子弟の生活実態と後継者育成の方策

荒 木 和 秋

The lifestyle of junior high school students on dairy farms
and the ways of successors for them as dairy farmers

Kazuaki ARAKI

酪農学園大学紀要 別刷 第31巻 第2号

Reprinted from

”Journal of Rakuno Gakuen University” Vol.31, No.2 (2007)

酪農家子弟の生活実態と後継者育成の方策

荒木 和 秋*

The lifestyle of junior high school students on dairy farms
and the ways of successors for them as dairy farmers

Kazuaki ARAKI*
(October 2006)

課 題

酪農はこれまで農業部門のなかで最も好況を呈しながらも、他の農業部門と同様、経営継承問題は深刻である。所得は豊かになったものの生活の豊かさは犠牲にされてきた側面がある。そのことが酪農特有の経営継承問題となってきた。

酪農における経営継承問題はすでに経営を継承した経営主や就農した後継者を対象に面談調査やアンケート調査が行われてきた。^(註1)そこでは、経営継承者ないしは予定者の意識構造の把握は行われてきたものの、一方で経営を継がなかった後継者の意識構造についての把握は行われていなかった。そこで将来、経営継承予定者である中学生の置かれている状況から経営継承を左右する生活実態を把握することで、経営継承に対する意識構造を解明し、今後の酪農後継者育成システムの形成について検討してみたい。

2. 酪農後継の意思決定

現在の就農者が就農に意思決定をどの段階にどういった理由で行ったかを過去の調査からみていきたい。まず、どの段階で行ったかをみたのが表1である。^(註2)浜中町及びその他の地区の50人の回答者のうち、最も多いのが高校時代の17人で、続いて中学時代の10人、他産業従事時の8人である。従って、中学、高校時代の生活環境や進路決定の意思決定の周囲の状況が重要な意味をもつ。特に、後継者か世帯主ないしは年齢別にみても若い世代での早い時期での決定の比重が高くなっている。彼らの多くが表2にみるように最終学歴は高校が22人、短大が12名、大学4名、中学が2名であり、学歴が高くなっているものの高校進学以前か高校在学中に就農の意思決定が行われていることがわかる。

彼らが酪農を選択した理由を見たのが表3である。最も多いのが「長男だったため」が11人、「家

表1 就農の意思決定時期

	地 区		経産牛頭数規模				後継・主		年 齢			
	浜中町	他	~49頭	50~74	75~99	100~	後継者	世帯主	~29歳	30~39	40~49	50~
	36	14	8	21	10	11	26	24	22	15	4	9
小学	3	2		2	2	1	1	4	2	1	1	1
中学	9	1		5	2	3	8	2	6	3		1
高校	11	6	1	8	3	5	9	8	7	5	2	3
専門学校	2		2				1	1	1	1		
短大	1	1	1			1	1	1	1			1
大学	2	2	1	2		1	1	3	1	2		1
他産業従事	7	1	3	3	2		5	3	4	3		1

資料：荒木和秋『酪農の経営継承に関するアンケート調査結果』

* 酪農学園大学酪農学部農業経済学科酪農畜産営農システム学研究室
Faculty of Dairy Science, Department of Agricultural Economics, Dairy and livestock farming system, Rakuno Gakuen University, Ebetsu, Hokkaido, 069-8501, Japan
所属学会：日本農業経済学会, 日本農業経営学会, 日本法学会, 農業問題学会, 日本市場学会, 日本草地学会, 北海道農業経済学会

表2 最終学歴

	地 区		経産牛頭数規模				後継・主		年 齢			
	浜中町	他	～49頭	50～74	75～99	100～	後継者	世帯主	～29歳	30～39	40～49	50～
	36	14	8	21	10	11	26	24	22	15	4	9
中学	1	1		2			1	1	1			1
高校	17	5	4	11	4	3	12	10	10	7	2	3
専門学校	6	2	2	2	3	1	5	3	4	2	1	1
高専	1		1					1		1		
短大	8	4		3	3	6	7	5	6	3		3
大学	2	2	1	2		1	1	3	1	2		1

資料：表1と同じ

表3 酪農を選んだ理由

	地 区		経産牛頭数規模				後継・主		年 齢			
	浜中町	他	～49頭	50～74	75～99	100～	後継者	世帯主	～29歳	30～39	40～49	50～
	36	14	8	21	10	11	26	24	22	15	4	9
長男	7	4	2	5		4	5	6	4	3		4
親からのすすめ												
家が農家	8	2	1	5	2	2	4	6	5	3	1	1
サラリーマン嫌い	3		2		1		2	1	1	2		
他に就きたい仕事なし	2			2			2		2			
地元に住む												
友人・仲間就農	1				1		1		1			
親の面倒	1			1			1		1			
動物・自然が好き		4	1	1	1	1		4		1	2	1
酪農に興味	11	3	1	5	4	4	10	4	7	5		2
酪農収入に魅力	1	1		1	1			2			1	1

資料：表1と同じ

が農家だったため」が10人であり、依然として「家」意識に縛られた経営継承が行われていることがわかる。さらに「サラリーマンが嫌い」が3人、「他に就きたい仕事なかったため」が2人であり、これら消極的理由の合計は26人である。一方、「酪農に興味があったため」は14人、「動物・自然が好きだったため」が4人で積極的理由が18人である。消極的、積極的理由を年齢別にみると若い世代で積極的理由がやや多くなっている。

以上の就農の意思決定の時期や理由の状況を踏まえ、現在の中学生がどのような生活環境にあり、酪農に対してどのような印象やイメージを抱いているのかアンケートを通して明らかにしてみたい。調査対象としたのは北海道道東の純酪農地帯にあるA町と熊本県北部の農村で畜産が盛んなB市である。北海道A町でのアンケートは二つの中学校の生徒を対象とし、生徒総数89名(1年生38名, 2年生28名, 3年生22名, 不明(以下NA)1名, 男子43名, 女

子44名, NA2名)であった。一方、熊本県B市でのアンケートは一つの中学校を対象とし生徒総数172名(1年生54名, 2年生57名, 3年生61名, 男子86名, 女子86名)であった。また、家の職業は表4にみるように北海道A町で酪農家は59.3%、熊本県B市で9.9%しかなく家の職業は多種であった。実施時期は2006年2～3月である。

3. 酪農家子弟の酪農の評価とその理由

酪農家子弟が家業をどのようにみているのか、「酪農の仕事は好きですか」という問いに対して、表5にみるように「好き」は全体の53名中20名、「きらい」は6名、「どちらともいえない」は27名であった。「好き」が圧倒的に多かったものの、地区で見ると「きらい」は熊本県B町がまったくなく、すべてが北海道A町であった。中学時代の「好き」か「きらい」かが直ちに酪農後継にはつながらないものの、中学時代に意志決定を行う子供達が多いことから無

表4 家の職業

	地域	酪農	酪農以外	酪農以外の内訳					計
				酪農以外の農業	サラリーマン	自営業	その他	NA	
人数 (人)	北海道A町	53	36	—	—	—	—	—	89
	熊本県B市	17	155	32	43	23	56	1	172
	計	70	191	32	43	23	56	1	261
構成比 (%)	北海道A町	59.6	40.4	—	—	—	—	—	100.0
	熊本県B市	9.9	90.1	18.6	25.0	13.4	32.6	0.6	100.0
	計	26.8	73.2	12.3	16.5	8.8	21.5	0.4	100.0

表5 酪農の仕事は好きですか（酪農家の子弟のみ）

	地域	酪農の仕事は好きですか			計
		好き	きらい	どちらとも いえない	
人数 (人)	北海道A町	13	6	17	36
	熊本県B市	7	—	10	17
	計	20	6	27	53
構成比 (%)	北海道A町	36.1	16.7	47.2	100.0
	熊本県B市	41.2	—	58.8	100.0
	計	37.7	11.3	50.9	100.0

視できない数値である。

では、酪農が「好き」か「きらい」かについて具体的な理由を見たのが表6である。まず、「好き」の理由について、全体で108人が挙げており（複数回答）、その中で最も多かったのが「動物が好きだから」が30人、続いて「自然の中で仕事ができるから」、「他人に命令されたり頭を下げる必要がないから」がそれぞれ19人、「自分のペースで仕事ができるから」が16人、「人間関係で苦勞することが無いから」が12人、「家族で仕事ができるから」が10人であった。

一方、「嫌い」の理由として表7にみるように全体で109人が挙げており（複数回答）、これは「好き」

の108人とほぼ同数であった。最も多かったのが「休日が少ない」が36人、続いて「重労働だから」が13人、「朝の搾乳時間が早いから」が12人、「ふん尿処理が嫌いだから」が11人であった。また、「休日が少ない」と同じような回答として「家族と一緒にいる時間や遊ぶ時間が少ないから」が9人であった。一方、北海道A町に特異な回答として「牧草の収穫調整が大変そうだから」がA町だけで8名あった。

従って、好きな理由が酪農の動物を扱ったり、自営業としての家族経営を挙げているのに対し、嫌いな理由は酪農の作業に由来する生活スタイルを挙げている。

表6 酪農家子弟が酪農が好きな理由（複数回答）

酪農が好きな理由	北海道A町		熊本県B市	
	実数	構成比 (%)	実数	構成比 (%)
動物が好きだから	18	24.3	12	35.3
家族で仕事ができるから	6	8.1	4	11.8
自分のペースで仕事ができるから	12	16.2	3	8.8
自然の中で仕事ができるから	14	18.9	5	14.7
他人に命令されたり頭を下げる必要がないから	12	16.2	7	20.6
人間関係に苦勞することがないから	9	12.1	3	8.8
その他	3	4.1	—	—
計	74	100	34	100

表7 酪農家子弟が酪農が嫌いな理由（複数回答）

酪農が嫌いな理由	北海道A町		熊本県B市	
	実数	構成比(%)	実数	構成比(%)
牛が嫌いだから	3	4.2	—	—
家族と一緒にいる時間や遊ぶ時間が少ないから	6	8.5	3	7.9
朝の搾乳時間が早いから	6	8.5	6	15.8
夜の搾乳時間が遅いから	3	4.2	4	10.5
休日が少ないから	21	29.6	15	39.5
仕事が好きくないから	4	5.6	1	2.6
重労働だから	9	12.7	4	10.5
牧草の収穫調製が大変そうだから	8	11.3	1	2.6
糞尿処理が嫌だから	7	9.9	4	10.5
その他	4	5.6	—	—
計	71	100	38	100

4. 中学生の家庭生活と学校生活の評価

では、中学生である酪農家子弟の生活はどのような実態になっており、また現在の学校生活をどのように評価しているのでしょうか。

(1) 学校生活の評価

「学校は楽しいですか」という問いに対して表8に見るように、「大変楽しい」が北海道A町で18%、熊本県B市で27.9%と10%の差が出てきた。「やや楽しい」では北海道A町で39.3%、熊本県B市で35.5

であった。

一方、「勉強は好きですか」という問いに対しては表9に見るように、「大変好き」は北海道A町で3.4%、熊本県B町で1.7%、「やや好き」は北海道A町で21.3%、熊本県B市で14%と両方の回答を合わせると北海道A町が熊本県B市を9%上回っていた。

北海道A町は「勉強がすき」の比率が高く、熊本県B市は「学校が楽しい」の比率が高いという対照的な結果となった。

表8 学校は楽しいですか

	地域	学校は楽しいですか						計
		大変楽しい	やや楽しい	ふつう	あまり楽しくない	楽しくない	NA	
人数(人)	北海道A町	16	35	31	6	—	1	89
	熊本県B市	48	61	51	8	4	—	172
	計	64	96	82	14	4	1	261
構成比(%)	北海道A町	18.0	39.3	34.8	6.7	—	1.1	100.0
	熊本県B市	27.9	35.5	29.7	4.7	2.3	—	100.0
	計	24.5	36.8	31.4	5.4	1.5	0.4	100.0

表9 勉強は好きですか

	地域	勉強は好きですか					計
		大変好き	やや好き	ふつう	あまり好きではない	嫌い	
人数(人)	北海道A町	3	19	28	23	16	89
	熊本県B市	3	24	76	43	26	172
	計	6	43	104	66	42	261
構成比(%)	北海道A町	3.4	21.3	31.5	25.8	18.0	100.0
	熊本県B市	1.7	14.0	44.2	25.0	15.1	100.0
	計	2.3	16.5	39.8	25.3	16.1	100.0

(2) クラブ活動と帰宅時間

帰宅時間について北海道と熊本県でどのような違いがあるのだろうか。クラブ活動の参加の割合は表10にみるように北海道A町で86.5%、熊本県B市で77.9%と参加率は非常に高くなっている。そこで表11はクラブ活動の有無別の帰宅時間をみたものである。まず、クラブ活動のある日を見ると北海道A町では5時が54.5%、4時が20.8%、6時が15.6%、3時が9.1%で5時が半数以上を占めていた。一方、熊本県B市では7時が90.3%、6時が8.2%と7時が圧倒的であった。

次に、クラブ活動のない日の帰宅時間をみると北海道A町では3時が56.2%、2時および4時がそれぞれ20.2%であった。一方、熊本県B市では5時が68%、6時が16.3%、4時が8.7%、7時が3.5%であった。

以上にみるように、北海道A町と熊本県B町の帰宅時間では実に2時間以上の差が生じていた。

(3) 学校以外での活動と酪農作業の手伝い

学校以外の習い事についてみたのが表12である。

表10 部活をやっていますか

	地域	部活をやっていますか		計
		していない	している	
人数 (人)	北海道A町	12	77	89
	熊本県B市	38	134	172
	計	50	211	261
構成比 (%)	北海道A町	13.5	86.5	100.0
	熊本県B市	22.1	77.9	100.0
	計	19.2	80.8	100.0

習い事をしている生徒の比率は北海道A町で36%、熊本県B市で51.2%と熊本県の比率が高かった。習い事の内訳は両地区とも学習塾が最も多く、続いて書道、ピアノの順であった。

一方、酪農家子弟の作業の手伝いについてみたのが表13である。学校がある「平日の手伝い」について、北海道A町では61.1%が手伝っているのに対し、熊本県B町は23.5%と少なかった。逆に、「土日や夏休みでの手伝い」については北海道A町が16.7%であったのに対し、熊本県B町では58.8%が高かった。

これは、北海道A町では生徒の帰宅時間がクラブ活動がある日で午後5時を中心に3～6時であったのに対し、熊本県B市では7時が90%を占め、熊本県B市の生徒は時間的に家の作業の手伝いは不可能なため、その分土日や夏休みに手伝うことが多くなっているものと思われる。一方、北海道A町では平日の手伝いが多い分、土日や夏休みなどでの手伝いが少なくなっているものと思われる。

(3) 就寝、起床時間

起床時間についてみたのが表14である。両地区とも6時30分を中心に山をなしているものの、熊本県B市での7時30分起床が1.7%であるのに対し、北海道A町では11.2%あった。一方、就寝時間については表15を見るようにモードが北海道A町では午後11時であるのに対し、熊本県B市では11時と12時になっており1時以降も15.7%と北海道A町の5.6%を大きく上回っていた。これは家族の就寝時間や府県農村地帯の生活習慣とも関係しているものと思われる。

表11 帰宅時間は何時頃ですか（部活の無い人や、無い日）

			2時	3時	4時	5時	6時	7時	NA	計
クラブ 活動 無し	人数 (人)	北海道A町	18	50	18	—	—	—	3	89
		熊本県B市	—	—	15	117	28	6	6	172
		計	18	50	28	117	28	6	9	261
クラブ 活動 有り	構成比 (%)	北海道A町	20.2	56.2	20.2	—	—	—	3.4	100.0
		熊本県B市	—	—	8.7	68.0	16.3	3.5	3.5	100.0
		計	6.9	19.2	10.7	44.8	10.7	2.3	3.4	100.0
クラブ 活動 有り	人数 (人)	北海道A町	—	7	16	42	12	—	—	77
		熊本県B市	—	—	—	—	11	121	2	134
		計	—	7	16	42	23	121	2	211
クラブ 活動 有り	構成比 (%)	北海道A町	—	9.1	20.8	54.5	15.6	—	—	100.0
		熊本県B市	—	—	—	—	8.2	90.3	1.5	100.0
		計	—	3.3	7.6	19.9	10.9	57.3	0.9	100.0

表12 下校後の習い事

	地 域	習い事の有無				習い事の内容				
		している	していない	NA	計	学習塾	書道	ピアノ	その他	計
人 数 (人)	北海道A町	32	54	3	89	11	6	5	14	36
	熊本県B市	88	84	—	172	48	24	16	27	115
	計	120	138	3	261	59	30	21	41	151
構成比 (%)	北海道A町	36.0	60.7	3.4	100.0	30.6	16.7	13.9	38.9	100.0
	熊本県B市	51.2	48.8	—	100.0	41.7	20.9	13.9	23.5	100.0
	計	46.0	52.9	1.1	100.0	39.1	19.9	13.9	27.2	100.0

表13 家の仕事の手伝いの有無と内容

	地 域	手伝って いる	手伝って いない	計	手伝っている家の仕事の内容					計	
					搾 乳	餌やり	糞出し	哺 乳	その他		
登校日	人 数 (人)	北海道A町	22	14	36	9	16	9	7	2	43
		熊本県B市	4	13	17	3	3	1	1	17	25
		計	26	27	53	12	19	10	8	19	68
	構成比 (%)	北海道A町	58	42	100	21	37	21	16	5	100
		熊本県B市	71	29	100	12	12	4	4	76	100
		計	62	38	100	63	100	53	42	100	100
休 日	人 数 (人)	北海道A町	6	30	36	14	22	15	12	5	68
		熊本県B市	10	7	17	6	7	3	4	17	37
		計	16	37	53	20	29	18	16	22	105
	構成比 (%)	北海道A町	17	83	100	21	32	22	18	7	100
		熊本県B市	59	41	100	16	19	8	11	46	100
		計	30	70	100	19	28	17	15	21	100

表14 起床時刻

	地 域	起床時刻は何時頃ですか					計
		5時	6時	6時30分	7時	7時30分	
人 数 (人)	北海道A町	8	19	30	22	10	89
	熊本県B市	9	33	78	49	3	172
	計	17	52	108	71	13	261
構成比 (%)	北海道A町	9.0	21.3	33.7	24.7	11.2	100.0
	熊本県B市	5.2	19.2	45.3	28.5	1.7	100.0
	計	6.5	19.9	41.4	27.2	5.0	100.0

表15 就寝時刻

	地 域	就寝時刻は何時頃ですか							計
		10時	11時	12時	1時	2時	3時	NA	
人 数 (人)	北海道A町	24	37	22	4	—	1	1	89
	熊本県B市	10	67	68	19	7	1	—	172
	計	34	104	90	23	7	2	1	261
構成比 (%)	北海道A町	27.0	41.6	24.7	4.5	—	1.1	1.1	100.0
	熊本県B市	5.8	39.0	39.5	11.0	4.1	0.6	—	100.0
	計	13.0	39.8	34.5	8.8	2.7	0.8	0.4	100.0

5. 家庭生活と家族とのコミュニケーション

酪農家子弟が後継者になるためには、家族とのコミュニケーションが不可欠である。そこでは毎日の食事を通しての会話や休日の旅行などでの家族とのつながりが重要な意味をもつ。

(1) 毎日の食事と家族との会話

毎日の食事を家族と一緒に取るということは最大のコミュニケーションである。本節で対象とするのは地区生徒全員の集計であり、酪農家子弟だけを抽出した数字ではない。まず、表16の上段は夕食の団欒形態について見たものである。両地区とも「家族全員」か「家族の誰かと」が9割近くであるが、熊本県B市において「子供だけ」ないしは「1人」の比率がやや高くなっている。これはクラブ活動で帰宅する時間が遅くなっていることや塾などの習い事をする生徒の比率が高かったことが影響している。

一方、朝食についてみると夕食とは対照的に「子

供だけで」や「1人」の比率が高くなっている。両者の合計を見ると北海道A町が52.8%、熊本県B市が39.6%と北海道A町の比率が高くなっている。また、熊本県B市で「朝食を食べない」生徒の比率が4.7%あることは、すでに中学生の段階で食事の乱れの徴候である。ただし、この数値の中に酪農家の子弟がどれだけ含まれているかは不明である。

では、食事の団欒形態が両親との日常の会話にどのように関係しているのかを見てみたい。表17は両親との会話の密度である。「よく話す」が北海道A町49.4%に対して熊本県B市では36.0%であった。「簡単な会話をする」が北海道A町で43.8%であったの対し、熊本県B市では52.3%であった。一方、「殆どない」が北海道A町で3.4%、熊本県B市で5.2%であり、概して北海道A町のほうが熊本県B市に比べて親子の関係がより密になっている。その理由として北海道A町で生徒の帰宅時間が熊本県B市よりも2時間ほど早く、両親と一緒にいる時間が長いことが考えられる。

表16 夕食および朝食の家庭での団らんの様子

	地域	朝食は家族と一緒に食べますか						計
		家族全員一緒に	家族の誰かと	子どもだけで	1人	食べない	NA	
夕食	人数 (人)	北海道A町	41	41	2	5		89
		熊本県B市	74	79	6	13		172
		計	115	120	8	18		261
	構成比 (%)	北海道A町	46.1	46.1	2.2	5.6		100.0
		熊本県B市	43.0	45.9	3.5	7.6		100.0
		計	44.1	46.0	3.1	6.9		100.0
朝食	人数 (人)	北海道A町	13	27	18	29	2	89
		熊本県B市	23	72	28	40	8	172
		計	36	99	46	69	10	261
	構成比 (%)	北海道A町	14.6	30.3	20.2	32.6	2.2	100.0
		熊本県B市	13.4	41.9	16.3	23.3	4.7	100.0
		計	13.8	37.9	17.6	26.4	3.8	100.0

表17 ご両親との会話はしていますか

	地域	ご両親との会話はしていますか					計
		よく話す	簡単な会話をする	挨拶や用件のみ	ほとんどない	NA	
人数 (人)	北海道A町	44	39	3	3	—	89
	熊本県B市	62	90	10	9	1	172
	計	106	129	13	12	1	261
構成比 (%)	北海道A町	49.4	43.8	3.4	3.4	—	100.0
	熊本県B市	36.0	52.3	5.8	5.2	0.6	100.0
	計	40.6	49.4	5.0	4.6	0.4	100.0

(2) 休日や旅行

では休日や長期休暇における家族との過ごし方はどうか。表18は、家族との休日の外出および長期休暇の旅行について見たものである。まず、休日の外出については「毎週出かける」が両地区とも10%であり、「月に2~3回」が北海道A町で56.2%、熊本県B市が45.3%、「ほとんど出かけない」が北海道A町で33.7%、熊本県B市で44.2%であり、北海道A町が外出の頻度が高かった。これは北海道A町は過疎地に位置するため、食料品や日常品の買出しに家族で出かけることが多いと思われる。また、夏休みや冬休みの家族旅行についても北海道A町が「よく出かける」が15.7%、「たまに出かける」が46.1%であり、熊本県B市のそれぞれ8.7%、43.6%を上回っていた。

北海道A町は都市から遠く遊ぶ場所も少なく刺激が少ないこと、酪農家の比重が多いことから年間の休日が少ないため、長期休暇における旅行の頻度が熊本県B市よりも高いものと思われる。

(3) 酪農後継の話し合い

家族との会話や休日、休暇の外出、旅行の頻度から、北海道A町において家族とのコミュニケーションが熊本県B市よりもより密であるという結果が出た。ただしこれらの数値は酪農子弟だけでなく、その他の職業の子弟も含んだ数値である。そうした状況の中で「酪農を将来やることで両親と話したことがありますか」について見たのが表19である。「話したことがある」は北海道A町で58.3%に対し熊本県B市では70.6%で、熊本県B市でよく将来のことが話し合われていることがわかる。これは、親のほうから将来の人生設計について積極的に子弟に対して話しかけているものと思われる、そのことで子弟が酪農の後継について意識を持ってくるものと思われる。

表19 酪農就農について両親との話し合いの有無

	地域	ある	ない	計
人数 (人)	北海道A町	21	15	36
	熊本県B市	12	5	17
	計	33	20	53
構成比 (%)	北海道A町	58.3	41.7	100.0
	熊本県B市	70.6	29.4	100.0
	計	62.3	37.7	100.0

6. アンケート結果の評価と後継者育成の方策

酪農家の子弟が意思決定を高校生ないしは中学生の時にしていることから、中学生の酪農に対する意識および生活実態を調べた。酪農の盛んな北海道A町と熊本県B市の両地区を対象としてアンケート調査を行った。北海道A町は酪農専業地帯であるが、一方では過疎地域であり、大都市の釧路市までは1時間~1時間30分を要する。熊本県B市は都市近郊農村であり、商店街が多数存在する市街地まで20分程度である。

そうした生活環境の中での両地区を比較することで興味ある結果が出てきた。北海道A町の生徒は下校時間が熊本県B市の生徒よりも2時間ほど早く、その中で酪農家子弟の家業の手伝う比率は熊本県B市の子弟よりも高かった。一方、熊本県B市の生徒は塾などの習い事が北海道A町の生徒に比べて、その割合は高かった。

過疎地に存在する北海道A町の生徒はスクールバスの通学であるため、帰宅時間が早く、家族との会話も多かった。それに対し、熊本県B市の生徒はクラブ活動に積極的に参加するとともに、友人と交友する地理的条件に恵まれていることから帰宅時間も遅く、また習い事も多かった。そのため学校生活は熊本県B市の生徒が「楽しい」という比率が北海道

表18 休日は家族と一緒に出かけますか

	地域	休日における家族との外出				計	夏休みや冬休みの家族旅行			計
		毎週出かける	月に2~3回出かける	ほとんど出かけない	NA		よく出かける	たまに出かける	ほとんど出かけない	
人数 (人)	北海道A町	9	50	30	—	89	14	41	34	89
	熊本県B市	17	78	76	1	172	15	75	82	172
	計	26	128	106	1	261	29	116	116	261
構成比 (%)	北海道A町	10.1	56.2	33.7	—	100.0	15.7	46.1	38.2	100.0
	熊本県B市	9.9	45.3	44.2	0.6	100.0	8.7	43.6	47.7	100.0
	計	10.0	49.0	40.6	0.4	100.0	11.1	44.4	44.4	100.0

A町よりも高かった。しかし、勉強への興味は北海道A町の比率が高かった。

両地区の地理的条件からくる生活環境が、北海道A町の生徒を家庭滞在型にし、熊本県B市の生徒を家庭外活動型にしているものと思われる。

一方、家族との関係をみると北海道A町のほうが熊本県B市よりも両親との会話は密であり、休日や夏休み、冬休みに家族と一緒に過ごす機会も多かった。

そうした生活環境、学校環境の中で、酪農の評価は北海道A町で評価が低く、また経営継承に対する会話も消極的であった。さらに親のほうからの子供に対する酪農後継についての話し合いも北海道A町でやや消極的であった。

そこで、今後、北海道A町で経営継承する子弟を多く残すための方策として、第1に北海道A町では生活の刺激のなさや単調さを嫌って都市に流出することが考えられることから、地域での交流活動や後継者教育を関係機関が積極的に行うこと。また、農村地域の自然の豊かさを認識してもらうことである。第2に酪農の仕事と生活をできるだけ切り離し、仕事優先の生活や仕事の大変さを家庭に持ち込まないことである。そのためには、親の生活態度や家族関係を良好に保ち、家庭生活をゆとりのある豊かなものにする必要がある。第3にそれらを保証するための外部条件の整備である。すでにコントラクター組織やヘルパー組織など作業面での充実は図られてきているものの、子供の帰宅後の学習、芸術、スポーツなどの受講機会や施設は北海道の酪農地帯では都市に比べはるかに劣っている。また、女性に対するカルチャークラブの開催や老人介護制度についても遅れている。それら生活面の充実を図る必要がある。

一方、熊本県B市では逆に都市への流失チャンスは大きいので、酪農の仕事としての魅力と農村生活の豊かさを伝えて酪農後継者の意識を高めることが重要である。

農業のなかで酪農は特に収益性が高く、夫婦二人とはいえサラリーマン以上の収益を上げることができる職業である。経営継承は農家の子弟しか認められておらず、こうした恵まれた経済条件が酪農家の親にも子供にも十分認識されていないのが現実である。そのことを再認識するとともに、子供の経営継承の環境づくりを親が積極的に進めることが求められている。

引用・参考文献

- (1) 「経営継承の実態と対策に関する調査報告書」、北海道農業金融問題連絡協議会、2002、及び「酪農経営の経営継承とその支援」(社)農村生活総合研究センター、2003などがある。
- (2) 荒木和秋「酪農における経営継承の実態と意向調査について」(社)酪農ヘルパー全国協会、2005、P4。

Summary

One of the problems on dairy farms is that there are few successors on them. Many dairy farmers decided to be a dairy farmer in their school days. So we sent questionnaires to two junior high schools in Hokkaido and Kumamoto Prefecture where dairying is flourishing and got 261 answers.

They love animals and the largest reason for loving dairying. They also dislike few vacations the largest reason for disliking dairying. Junior high school students in Hokkaido talk and go out with their parents more often than students in Kumamoto. However students in Kumamoto discuss with their parents about their future more often than students in Hokkaido. Parents have to discuss with their children about their future and make efforts to give their children the best life style.